



# 枕 草 子

池 田 龜 鑑



河 出 書 房

現代語 日本古典文學全集

昭和二十八年十一月二十五日初版印刷  
昭和二十八年十一月三十日初版發行

枕草子

定價 貳百八拾圓

地方定價 貳百九拾圓



譯者

池田 龜鑑

發行者

河出 孝雄

印刷者

小泉 輝章

東京都千代田區神田小川町三ノ八

發行所 株式會社 河出書房

振替口座東京一〇八〇二  
電話神田(25)三一七四

印刷 小泉・製本 女勇堂

## 譯者のことば

### ——枕草子の全譯にあたつて——

#### 一 古典の「解釋」ということについて

「解釋」ということばは、いろいろな場合に用いられているが、要するに、原作の眞意に復歸する、原作が本來何を意圖していたかを正確にとらえることだとおもう。二千年の長い間、フィロロギイの模索してきたのもこれであつた。このことは、口でいうほど容易なことではない。たとえ、時代を同じくしている作品であっても、すでに異なる個性と環境にある讀者は、それぞれみな原作者とは別の、個々の享受主體としてそれをうけとつてゐるからだ。さいわいに享受者の學識がひろく、天分が豊かで、原作者との間が生命的に近ければ近いほど、その作品は、より正確に解釋されるわけである。古典の場合では、時代を遠く隔てているという點から、「解釋」は、いっそう複雑で困難な問題とならざるをえない。

しかしながら、現代人が現代人としての個性と時代感覺とによつて古典を読み、新たな感銘をうける。新しい人間形成がそこに營まれる、ということは、解釋における當然な現象である。それでこそ、古典は不滅の生命をもつて、どのような時代にも生き得るわけだとおもう。古典を現代語に譯出するという營みにおいては、先ず何よりもこのことが、きびしく自覺されていなければならないだろう。原作に對して、一方では學問的に忠實であり正確であると同時に、他方では、それ自身現代人の共感に堪え得る魅力のある讀みものである、ということ、

すなわち、註釋と創作とが渾然としたものでありたい、それが現代語譯のあり方だ、と、そういうふうに考えられる。

枕草子は、十一世紀の初頭、今から九百數十年前に書かれた作品である。それを現代語に譯出することは、容易ならぬ仕事である。實は不可能なことかもしれない。その困難を敢えておかしてみようとして、譯者は、たゞ努力以外にはたよるべきものないことを悟った。枕草子という作品は、實はそうした獻身に値してなおあまりある作品なのではあるが、たゞ譯者の才能は、はたして努力だけで、原作の眞實と神韻をつたえ得たかどうか、はなはだ心もとない。實をいうと、この努力は、今後、止む時なくつづけられなければならないまい。譯者の「人間」が永久に未完成であるように、枕草子という「古典」の現代語譯も、譯者の生涯を通じて完成の日はないだろう。古典は、虹のように、常にむこうにある。われわれにとって、それは光りではあるが、いつも哀しみを伴う光りなのである。谷崎氏やその他の人々が、源氏の新譯に注がれた誠意と努力、それは不敏の譯者を導いてくれるよき先達であり、哀しみにうるむ光明でもあった。

## 二 テキスト（本文）について

古典作品は、「時」の経過によって、故意であるなしにかかわらず、原作にくらべて、多少とも形を變えてきている。原作者の意圖するところは何であつたか、ということを明らかにするためには、先ずその本文の正しい形態が決定されねばならぬ——とは、古典文獻學の入門的な常識でありながら、どうかすると無視されがちである。現代文學の場合とはちがつて、古典文學の場合には、このことはきわめて重要な、しかもこえがたい困難を

伴なう問題なのだ。

枕草子にも異本が多い。二十數年來、源氏物語研究と併行して、枕草子諸異本の本文研究をつづけたが、現在までの研究の結論として、從來傳統的に信奉されてきている印象批評的な系統論や成立論にそのまま従うことはできない。時には、つよい反撥をさえ感ずる。かつて提案したことのある四大系統の分類は、今日ではやっと認められてきたようだが、現段階においていえることは、數十種 of 古寫本のなかのどれ一つ、執筆當時の組織や形態をとどめてきたものはない、問題の解決は今後にある、ということだ。

このたび全譯にあたり、テキストとして選んだのは、いわゆる「三卷本」系統の一本である。それは、いろいろの點からして、この系統の本が、最も歪みのすくない本文を保有していると信ぜられるからであり、また、これによる日本古典全書の本（田中重太郎氏校訂）が、現在最も廣く流布していると考えられるからである。また、今一つには、三卷本の全譯はまだ行われていないので、安直に春曙抄などの古註によるのに比べ、そこには、不毛の地に立ち向う困難はあるが、同時に、開拓者のよろこびがある、本書によってその先鞭をつけてみたい、——という、やや野心めいた、ちょっと、身分にすぎた抱負がなかったわけではない。

なお三卷本の誤りと認められるものは、譯者の信ずるところにより、一應他の諸本の本文に従ったが、そういう時には、かならずその由をことわって責任を明らかにしておいた。

### 三 章段について

枕草子は、後に「解説」においてのべるように、雜纂形態の本と類纂形態の本と二大別することができる。三

卷本や春曙抄の本などは前者であり、前田家本や堺本などは後者である。しかも、それらは、どれも枕草子の原形を伝えるものではない。前田家本の組織は、原形のそれに近いものと思わせる。しかし、なお、後世の人の手によって再編集されたものとみるべきである。

そのような事情で、章段の立てかたも、諸本によって非常な相違があり、三卷本そのものにおいても、種々の問題があつて、現在ではまだ定説をみない。本書においては、すでに古典全書の本文を認めた以上、章段もしばらくこれに従つておいたが、しかし、譯者としては、また、別に意見がないわけでもない。今後、なおいっその研究をかさね、多くの人々の知識を結集して、合議・検討のうえ、缺陷の少ない定本を作りたいものである。本書はその試みの一つとして、一段のうち、明らかに主題の異なるものが混入していると認められるものは、それを別の章として立てる方針をとった。目次において、一段のうち、○印をもつて表すものが二つ以上ある場合は、そういう意圖をもつものの表現である。この○印の下には、主題に應じて、それぞれの題を掲げてある。

なお、日記的諸段において、例えば「積善寺供養」の段のごとき、長文にわたるものは、内容からみて、便宜小節に分け、同様に○印によって、下にそれぞれ小見出しをつける方針をとったが、一々の段數の下には、原文の冒頭の文句をそのまま示す方針をとった。従つて讀者はこの目次によって、冒頭の文句からも、記事の主題からも、いずれからでも、求める章段を検索することができるわけである。

これは、章段や組織について、春曙抄のような末流本文の體系を、そのまま無批判に信奉する舊説に對する批判ともなりうるであらう。舊説は唯一の根據として、「連想」なるものを舉げるが、その連想が、はたして原作者のそれであるか、再編集者のそれであるかは、はなはだ疑わしく、その疑點に對して何等明答をあたえようとしない。ここに一切の謬見の淵源があるといわなければならぬ。——譯者はそのように考える。

枕草子の原<sup>ほん</sup>型<sup>がた</sup>を再建するためには、この「連想」の實態を徹底的に究明し、その上に立つて、眞實の「主題」と、擬装した「主題」とをきびしく區別し、そこから本質研究への第一歩をふみ出すべきものとおもう。

#### 四 譯出について

前にものべたように、原作に忠實であること、同時に獨立した讀物であること、この二つが兼ね備えられていることが、古典の現代語譯——と限らず、すべての翻譯文學の重要な條件である。本書においては、この鐵則にどこまでも忠實であらうとして、一字一句もゆるがせにしない逐語譯の方針をとった。この方法が、實はごま化しのきかない厄介な方法であるだけに、原作に誠實であり得ると信じたからである。往々にして「原作者の精神」という美名のもとに、故意にむずかしい原文をさけ、極端な意譯も行われるようだが、それは安易な道であるだけに、ダイジェストか翻案ならいざしらず、「譯」とはいえないと考えられる。少くとも學究の領域のものではないと思うが、どうであらうか。ともかく、讀者がめいめいのすぐれた鑑賞力によつて、「原作」を發展させていただくための踏臺になることを、不肖の譯者は念願している。

枕草子には、敘述の上で、體言止や連體形止が多く、簡潔な表現が文體の一性格となつてゐるので、それを、どうかすると冗漫な敘述になり易い現代語に譯出するには、相當の苦心を要する。本書では、たとえば頻繁に用いられている「をかし」の語についても、場合場合に應じて、適當な現代語を見出すことにつとめた。

枕草子には本文に誤脱が多く、意味の通じない部分がある。そういう場合は、次の方法で處理する方針をとつ。そう、う部分をはっきりと指摘することも、學究者の責任の一つだと考えたからである。



1 長文にわたる場合は、不明の字數を示して、本文中にその旨をこわった。

例、二〇九段の四。……（十一字分不明）

2 短文で、他本により訂正したものは、註にその由をこわった。

例、二一〇段\*2 こは、三卷本に「うちかかりたるも」とあるところだが、前田本や能因本に「かかへたるも」とあり、意味はその方がよさそうなので、それによつて譯した。

3 やむをえず省略したのも、註にその旨をこわった。

例、二五七段\* 原文に「ほどき立てる」とあるが、「ほどき」の意味がよく分らない。三卷本以外の諸本にはない段なので、しばらく、譯にあらわさないでおく。

## 五 註について

枕草子はいわば知性を主とする文學であり、また事實にもとづく文學でもある。そこで、註においては、特に次の三點に注意した。

1 原文に詩や歌が引用されている場合、その前後を示し、引用の意味を説明して、記事の興味が理解され易いように處理した。

2 その段の事實の年時を、推定し得る限り示して、作者の人間像が時代環境の上にくっきりと浮かび上るよう配慮した。この年時、あるいは人名については、すべて結論のみを示すにとどめるが、それは單に舊註の孫引きではなく、諸文獻について調査し考證した結果である。舊註のそれと異なるものもあり、それらの中には

譯者自身の認説もないとはいわれない。今後讀者諸氏の高教をまつて、段々と訂正し、よいものにしてゆきたい念願である。

3 本文及び解釋上の重要問題についても説明を施したが、その他は、固有名詞、事物の名稱、風俗、故實などに關して、現代語に表し得ない場合も、一々註を附することはしなかった。本書の目的とするところは、現代人の感覺をもつて、枕草子を一つの全體としてとらえるという點にあるので、受験參考書のように、原文を小さく切りさいなみ、これらに部分的な註釋を加えるような作業は、かえつてその目的を妨害するものと考えられたからである。いわゆる、樹々は森を見るさまたげをする——という危険を、考慮しての處置である。

本書の譯出は、先ず原文と對照して逐語譯をこころみ、ついで、その譯を他の人に朗讀してもらい、その朗讀を聴き、その耳からくる語感によつて、第一の譯文を訂正し、さらに今一度、譯者みずから原文と對照して、目からくるものにくらべて考えなおすという、三段の手續を、數年間くりかえして來た途上のものである。これは別に吹聴するほど名譽なことではなく、むしろ、はなはだ不名譽なことかも知れないが、事實なのだから仕方がない。むかし、恩師が、うまいいまわそうとするな、まちがいをすくなくするようにつとめよ、とおしえられた、味わい深い言葉が思い出される。とにかく、現代語譯という仕事は、一介の學究にすぎない譯者にとつては、手におえないむずかしい仕事であつた。つくづくそうおもう。



|   |               |   |
|---|---------------|---|
| 三 | にくきもの         | 三 |
| 三 | 心ときめきするもの     | 三 |
| 三 | すぎにしかた戀しきもの   | 三 |
| 三 | ころゆくもの        | 三 |
| 三 | 檳榔毛は          | 三 |
| 三 | 説經の講師は        | 三 |
| 三 | 菩提という寺に       | 三 |
| 三 | 蓮の花びら         | 三 |
| 三 | 小白河といふ所は      | 三 |
| 三 | ○小白河の結縁八講     | 三 |
| 三 | 七月ばかりいみじう暑ければ | 三 |
| 三 | ○曉の情趣         | 三 |
| 三 | 木の花は          | 三 |
| 三 | 池は            | 三 |
| 三 | せちは           | 三 |
| 三 | 花の木ならぬは       | 三 |
| 三 | 鳥は            | 三 |
| 三 | あてなるもの        | 三 |
| 三 | 蟲は            | 三 |
| 三 | 七月ばかりに風いたう吹きて | 三 |
| 三 | ○初秋の晝寢        | 三 |
| 三 | にげなきもの        | 三 |
| 三 | 細殿に人あまたるて     | 三 |
| 三 | ○細殿の前         | 三 |

|   |             |   |
|---|-------------|---|
| 四 | 主殿司こそ       | 四 |
| 四 | ○主殿司の女官     | 四 |
| 四 | 隨身          | 四 |
| 四 | 職の御曹司の西面の   | 四 |
| 四 | ○寝起きの顔      | 四 |
| 四 | 馬は          | 四 |
| 四 | 牛は          | 四 |
| 四 | 猫は          | 四 |
| 四 | 雑色・隨身       | 四 |
| 四 | 小舎人わらわ      | 四 |
| 四 | 牛飼          | 四 |
| 四 | 殿上の名對面こそ    | 四 |
| 四 | ○殿上の名對面     | 四 |
| 四 | 若くよろしき男の    | 四 |
| 四 | ○召使の呼び方     | 四 |
| 四 | 若き人・ちごどもなどは | 四 |
| 四 | ○肥えていること    | 四 |
| 四 | ○遊ぶ子供       | 四 |
| 四 | よき家の中門あけて   | 四 |
| 四 | ○中門のなか      | 四 |
| 四 | 瀧は          | 四 |
| 四 | 川は          | 四 |
| 四 | 曉に歸らむ人は     | 四 |
| 四 | ○曉のわかれ      | 四 |

|   |                   |   |   |
|---|-------------------|---|---|
| 六 | 橋                 | は | 四 |
| 三 | 里                 | は | 四 |
| 三 | 草                 | は | 四 |
| 三 | 草の花は              | は | 四 |
| 三 | 集                 | は | 五 |
| 三 | 歌の題は              | は | 五 |
| 三 | おぼつかなきもの          | は | 五 |
| 六 | たとしへなきもの          | は | 五 |
| 六 | 忍びたる所において         | は | 五 |
| 六 | 忍びどころ             | は | 五 |
| 六 | 懸想人にて來たるは         | は | 五 |
| 六 | ○供びと              | は | 五 |
| 三 | ありがたきもの           | は | 五 |
| 三 | 内裏の局              | は | 五 |
| 三 | ○細殿の局             | は | 五 |
| 三 | まいて臨時の祭の調樂などは     | は | 五 |
| 三 | ○臨時の祭の調樂          | は | 五 |
| 三 | 職の御曹司におはしますところ    | は | 五 |
| 三 | ○左衛門の陣            | は | 五 |
| 三 | あぢきなきもの           | は | 五 |
| 三 | 心地よげなるもの          | は | 五 |
| 三 | 御佛名のまたの日          | は | 五 |
| 六 | ○琵琶の聲やんで          | は | 五 |
| 六 | 頭の中將のすずろなるそら言を聞きて | は | 五 |

|   |                |   |   |
|---|----------------|---|---|
| 六 | 草の庵            | は | 五 |
| 六 | かへる年の二月二十餘日    | は | 五 |
| 六 | ○二月の梅壺         | は | 五 |
| 六 | ○瓦に松はありつや      | は | 五 |
| 六 | 里にまかでたるに       | は | 五 |
| 六 | ○めくはせ          | は | 五 |
| 六 | もののはれ知らせ顔なるもの  | は | 五 |
| 六 | さてその左衛門の陣などに   | は | 五 |
| 六 | ○なかなるをとめ       | は | 五 |
| 六 | 職の御曹司におはしますところ | は | 五 |
| 六 | ○常陸の介          | は | 五 |
| 六 | ○雪山            | は | 五 |
| 六 | めでたきもの         | は | 五 |
| 六 | なまめかしきもの       | は | 五 |
| 六 | 宮の五節出ださせ給ふに    | は | 五 |
| 六 | ○五節の舞姫         | は | 五 |
| 六 | 細太刀に平緒つけて      | は | 五 |
| 六 | ○細太刀           | は | 五 |
| 六 | 内裏は五節のころこそ     | は | 五 |
| 六 | ○五節のころ         | は | 五 |
| 六 | 無名といふ琵琶の御琴を    | は | 五 |
| 六 | ○無名という琵琶       | は | 五 |
| 六 | 上の御局の御簾の前にて    | は | 五 |
| 六 | ○別れは知りたりや      | は | 五 |

|     |              |    |
|-----|--------------|----|
| 九一  | ねたきもの……………   | 八〇 |
| 九二  | かたはらいたきもの…   | 八一 |
| 九三  | あさましきもの……    | 八二 |
| 九四  | くちをしきもの……    | 八三 |
| 九五  | 五月の御精進のほど…   | 八三 |
|     | ○ほととぎすを尋ねて   | 八三 |
|     | ○元輔のむすめ……    | 八七 |
| 九六  | 職におはしますころ…   | 八八 |
|     | ○秋の月の心…………   | 八八 |
| 九七  | 御かたがた君達上人など  | 八九 |
|     | ○九品蓮臺の間には…   | 八九 |
| 九八  | 中納言殿まゐりたまひて  | 八九 |
|     | ○海月の骨……………   | 八九 |
| 九九  | 雨のうちへ降るころ…   | 九〇 |
|     | ○信經のこと…………   | 九〇 |
| 一〇〇 | 淑景舎春宮にまゐりたまふ | 九一 |
|     | ○登華殿の御まゐり    | 九一 |
| 一〇一 | 殿上より梅の花の……   | 九六 |
|     | ○早く落ちにけり……   | 九六 |
| 一〇二 | 二月つごもりごろに…   | 九六 |
|     | ○南秦の雪……………   | 九六 |
| 一〇三 | はるかなるもの……    | 九七 |
| 一〇四 | 方弘は……………     | 九七 |
| 一〇五 | 見苦しきもの…………   | 九八 |

|     |               |     |
|-----|---------------|-----|
| 一〇六 | いひにくきもの……     | 九八  |
| 一〇七 | 關……………        | 九八  |
| 一〇八 | 森……………        | 九八  |
| 一〇九 | 原……………        | 九八  |
| 一一〇 | 四月のつごもりがたに…   | 九八  |
|     | ○淀の渡り……………    | 九八  |
| 一一一 | つねよりことにきこゆるもの | 九九  |
| 一一二 | 繪にかき劣りするもの…   | 一〇〇 |
| 一一三 | かきまさりするもの……   | 一〇〇 |
| 一一四 | 冬は夏は……………     | 一〇〇 |
| 一一五 | あはれなるもの……     | 一〇〇 |
| 一一六 | 正月に寺にこもりたるは   | 一〇一 |
|     | ○正月の参籠…………    | 一〇一 |
| 一一七 | いみじう心づきなきもの   | 一〇四 |
| 一一八 | わびしげに見ゆるもの…   | 一〇五 |
| 一一九 | 暑げなるもの…………    | 一〇五 |
| 一二〇 | はづかしきもの……     | 一〇五 |
| 一二一 | むとくなるもの……     | 一〇六 |
| 一二二 | 修法……………       | 一〇六 |
| 一二三 | はしたなきもの……     | 一〇六 |
|     | ○はしたなきもの……    | 一〇六 |
|     | ○八幡の行幸…………    | 一〇六 |
| 一二四 | 關白殿黒戸より……     | 一〇七 |
|     | ○黒戸の前……………    | 一〇七 |

|    |               |     |
|----|---------------|-----|
| 一五 | 九月ばかり         | 〇八  |
| 一六 | 〇雨後の秋色        | 〇八  |
| 一七 | 七日の日の若菜を      | 〇八  |
| 一八 | 〇耳無草          | 〇八  |
| 一九 | 二月官の司に        | 〇九  |
| 二〇 | 〇定考           | 〇九  |
| 二一 | 頭の辨の御もとより     | 〇九  |
| 二二 | 〇へいだん一包       | 〇九  |
| 二三 | などてつかさ得はじめたる  | 〇一〇 |
| 二四 | 〇衣服の名         | 〇一〇 |
| 二五 | 故殿の御ために       | 〇一一 |
| 二六 | 〇月秋と期して       | 〇一一 |
| 二七 | 〇齊信の君         | 〇一二 |
| 二八 | 頭の辨の職にまゐりたまひて | 〇一二 |
| 二九 | 〇鳥のそらね        | 〇一二 |
| 三〇 | 五月ばかり         | 〇一四 |
| 三一 | 〇この君          | 〇一四 |
| 三二 | 圓融院の御はての年     | 〇一五 |
| 三三 | 〇藤三位          | 〇一五 |
| 三四 | つれづれなるもの      | 〇一七 |
| 三五 | つれづれ慰むもの      | 〇一七 |
| 三六 | とりどころなきもの     | 〇一七 |
| 三七 | なほめでたきこと      | 〇一七 |
| 三八 | 〇お神樂          | 〇一七 |

|    |                      |     |
|----|----------------------|-----|
| 一六 | 殿などのおはしまさで後          | 〇一九 |
| 一七 | 〇牡丹の叢                | 〇一九 |
| 一八 | 〇山吹の花                | 〇二〇 |
| 一九 | 〇天に張り弓               | 〇二二 |
| 二〇 | 正月十餘日のほど             | 〇二三 |
| 二一 | 〇木登り                 | 〇二三 |
| 二二 | きよげなる男の              | 〇二三 |
| 二三 | 〇雙六をする人              | 〇二三 |
| 二四 | 碁をやむごとなき人のうつとて       | 〇二四 |
| 二五 | 〇碁をうつ人               | 〇二四 |
| 二六 | おそろしげなるもの            | 〇二四 |
| 二七 | きよしと見ゆるもの            | 〇二四 |
| 二八 | いやしげなるもの             | 〇二四 |
| 二九 | 胸つぶるるもの              | 〇二四 |
| 三〇 | うつくしきもの              | 〇二四 |
| 三一 | 人ばへするもの              | 〇二五 |
| 三二 | 名おそろしきもの             | 〇二六 |
| 三三 | 見るにことなるごとなきものの文字に書きて | 〇二六 |
| 三四 | ことごとしきもの             | 〇二六 |
| 三五 | むつかしげなるもの            | 〇二六 |
| 三六 | えせものごとなきもの           | 〇二六 |
| 三七 | 苦しげなるもの              | 〇二七 |
| 三八 | うらやましげなるもの           | 〇二七 |
| 三九 | とくゆかしきもの             | 〇二八 |

|    |              |     |
|----|--------------|-----|
| 一五 | 女のとおり住むところは  | 一五七 |
| 一五 | 六位の藏人        | 一五七 |
| 一五 | 六位の藏人などは     | 一五七 |
| 一五 | 女は           | 一五七 |
| 一五 | 法師は          | 一五七 |
| 一五 | 大夫は          | 一五七 |
| 一五 | 權の守は         | 一五七 |
| 一五 | 受領は          | 一五七 |
| 一五 | 君達           | 一五七 |
| 一五 | 上達部は         | 一五七 |
| 一五 | 野は           | 一五七 |
| 一五 | 井は           | 一五七 |
| 一五 | 遠く近きもの       | 一五七 |
| 一五 | 近く遠きもの       | 一五七 |
| 一五 | 讀經は          | 一五七 |
| 一五 | 昔おぼえてふようなるもの | 一五七 |
| 一五 | たのもしげなきもの    | 一五七 |
| 一五 | 左京のこと        | 一五七 |
| 一五 | 三十の期に及ばず     | 一五七 |
| 一五 | 人間の四月        | 一五七 |
| 一五 | 宰相の中將齊信      | 一五七 |
| 一五 | あいたんどころ      | 一五七 |
| 一五 | 故殿の御服のころ     | 一五七 |
| 一五 | ころもとなきもの     | 一五七 |

|    |               |     |
|----|---------------|-----|
| 一五 | 眞夏的美感         | 一五七 |
| 一五 | いみじう暑き晝なかに    | 一五七 |
| 一五 | 男の獨り住み        | 一五七 |
| 一五 | すぎすきしくて獨住みする人 | 一五七 |
| 一五 | 病は            | 一五七 |
| 一五 | 乳母の夫          | 一五七 |
| 一五 | かしこきものは       | 一五七 |
| 一五 | 位について         | 一五七 |
| 一五 | こそ            | 一五七 |
| 一五 | したり顔なるもの      | 一五七 |
| 一五 | くしやみ          | 一五七 |
| 一五 | 美しき后の宮        | 一五七 |
| 一五 | 宮にはじめてまゐりたるころ | 一五七 |
| 一五 | 御形の宣旨         | 一五七 |
| 一五 | 御形の宣旨         | 一五七 |
| 一五 | 兵衛の藏人         | 一五七 |
| 一五 | 村上の先帝の御時に     | 一五七 |
| 一五 | 雪の夜更け         | 一五七 |
| 一五 | 雪のいと高うはあらで    | 一五七 |
| 一五 | 曉の別れ          | 一五七 |
| 一五 | あるところに何の君とかや  | 一五七 |
| 一五 | 夜なかの客         | 一五七 |
| 一五 | 宮仕へ人の里なども     | 一五七 |
| 一五 | 女のひとり住む家      | 一五七 |



|    |                 |    |
|----|-----------------|----|
| 一六 | 南ならずは東の廂の……     | 一四 |
| 一七 | ○夏の宵……          | 一四 |
| 一八 | 大路近なるところにて聞けば…… | 一四 |
| 一九 | ○曉の大路……         | 一四 |
| 二〇 | ふと心おとりとかするものは…… | 一四 |
| 二一 | ○言語について……       | 一四 |
| 二二 | 宮仕へ人のもとに……      | 一四 |
| 二三 | ○女に依存する男……      | 一四 |
| 二四 | 風……             | 一五 |
| 二五 | ○風……            | 一五 |
| 二六 | ○秋吹く風……         | 一五 |
| 二七 | 野分のまたの日……       | 一五 |
| 二八 | ○野分の翌朝……        | 一五 |
| 二九 | こころにくきもの……      | 一五 |
| 三〇 | ○こころにくきもの……     | 一五 |
| 三一 | ○夜ふけの参内……       | 一五 |
| 三二 | ○宮中の局……         | 一五 |
| 三三 | ○御簾の移り香……       | 一五 |
| 三四 | 島……             | 一五 |
| 三五 | 濱……             | 一五 |
| 三六 | 浦……             | 一五 |
| 三七 | 森……             | 一五 |
| 三八 | 寺……             | 一五 |
| 三九 | 經……             | 一五 |

|    |             |    |
|----|-------------|----|
| 一六 | 佛……         | 一四 |
| 一七 | ○書……        | 一四 |
| 一八 | ○物語……       | 一四 |
| 一九 | 陀羅尼は……      | 一四 |
| 二〇 | ○陀羅尼と經……    | 一四 |
| 二一 | あそびは……      | 一四 |
| 二二 | ○音楽は夜……     | 一四 |
| 二三 | あそびわざは……    | 一四 |
| 二四 | 舞……         | 一五 |
| 二五 | 彈くものは……     | 一五 |
| 二六 | 調……         | 一五 |
| 二七 | 笛……         | 一五 |
| 二八 | 見るものは……     | 一五 |
| 二九 | ○見るものは……    | 一五 |
| 三〇 | ○賀茂の臨時の祭……  | 一五 |
| 三一 | ○行……        | 一五 |
| 三二 | ○五月……       | 一五 |
| 三三 | ○祭のかへさ……    | 一五 |
| 三四 | 五月ばかりなどに……  | 一五 |
| 三五 | ○五月の山里……    | 一五 |
| 三六 | いみじう暑きころ……  | 一五 |
| 三七 | ○夕涼み……      | 一五 |
| 三八 | 五月四日の夕つかた…… | 一五 |
| 三九 | ○五月四日の夕がた…… | 一五 |